



Title	茂山忠三郎家蔵『翁秘書』
Author(s)	茂山, 恭仁子
Citation	演劇学論叢. 2010, 11, p. 462-469
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/97472">https://doi.org/10.18910/97472</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## ■資料紹介

### 茂山忠三郎家蔵『翁秘書』

茂山 恭仁子

ここに紹介するのは茂山忠三郎家蔵の翁伝書二点のうち的一点である。同家に所蔵される翁伝書二点のうち、一つは『翁秘書』（卷子、一巻、もう一つは『翁口伝極秘書拔』（卷子、一巻）である。この二点の卷子本は金剛右京氏（明治五年～昭和十一年）が所蔵していたものであったが、右京夫人より三世茂山忠三郎良一が形見として譲り受けたものである。右京氏は昭和十一年に逝去されたが、その納棺の際、立ち会った能楽師に伝来の伝書が形見として渡され、それ以外の坂戸金剛家に伝わる書はすべて棺の中に入れられて焼失したという。

金剛右京氏と茂山忠三郎家は深い縁がある。二世茂山忠三郎良豊は右京氏の仲人をし、また右京氏は三世茂山忠三郎良一の仲人をしたという関係にあり、茂山家の過去帳には親族の並びに右京氏の名が入れられている。現忠三郎によれば、跡継ぎに恵まれなかった右京氏から金剛家へ養子に入らないかという話があったが、その時、三世忠三郎良一は、子息の良介（昭和二十年に戦死）と俤一（現忠三郎）の兄弟で狂言をさせたいという

想いから、丁重にお断りをしたという。この他にも生前の右京氏から三世忠三郎がゆずられたものに、「三番三」を舞う時に用いる「腰板」がある。これは普通は木でできているが、右京氏から譲られたものは皮でできており、現忠三郎によれば、非常に使い安い板だと言う。

ここに紹介する『翁秘書』は天地二〇・五センチ、長さ七三・五センチ、表紙は草花模様の布表紙。料紙は鳥子紙の美本である。題簽なし。内題は「翁秘書」。書体は全体的に楷書に近い読みやすい字で、末尾に「宝永二歳<sup>乙酉</sup>九月吉曜日／金剛太夫坂戸久明」と金剛大夫久明の署名がある。金剛大夫久明は『重修猿楽伝記』によると、正徳五年（一七一五）の没で、享年は不明。

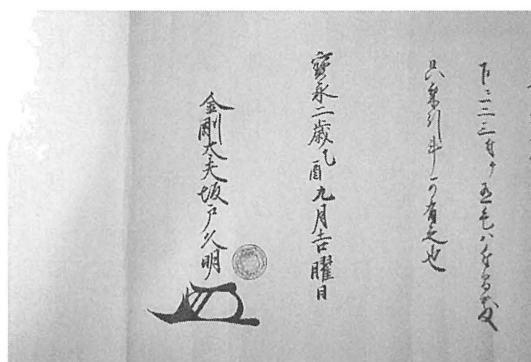
この奥書の署名と本文の文字は同筆であり、本文も金剛大夫久明の自筆と認められる。もう一つの翁伝書は「交野長命久敦」の署名があるものだが（長命久敦は南山城を拠点にしていた金剛座の役者らしい）、これについては別途紹介の機会を持ちたいと思う。

この『翁秘書』には翁が演じられる際の作法が詳細に記されている。その内容を本書の見出しで記すと、「翁秘書」「翁之次第」「極秘書」「翁舞の内」「鈴之事」「風流之事」「開口之事」「翁所作之事」「太夫後見之事」となる。

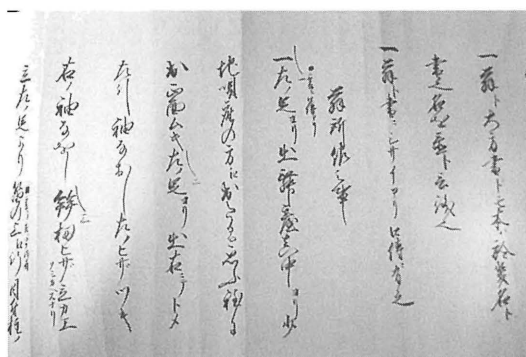
このうちの「翁舞の内」には、翁舞の足拍子を「天地人」の三才で説明する神道吉田家の翁秘説が認められる。吉田家の翁秘説は江戸時代に観世・宝生・喜多の三流の役者たちが伝授を受けており、その秘説は金剛流の役者にも影響を及ぼしている

ことが指摘されていたが（天野文雄氏『翁猿楽研究』）、本書は金剛大夫の自筆であり、本書によって吉田家の翁秘説が金剛流にも及んでいたことが確実になったと言える。

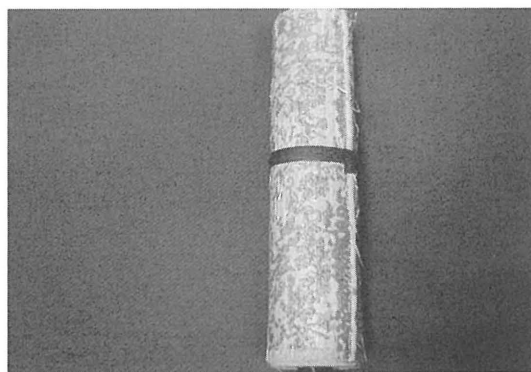
なお、天理図書館蔵『翁大事御相伝人数書』によると、紀州徳川家の家臣で能役者でもあった徳田藤左衛門隣忠は宝永二年（一七〇五）仲夏に、吉田家から「翁の大事」を伝授されているが、本書の奥書年記はその四ヶ月後である点が注意される。徳田隣忠はまず渋谷道修を師としたが、のちに金剛大夫久明を師とし



『翁秘書』奥書



『翁秘書』「翁所作之事」



『翁秘書』

ているから（御世話筋秘曲）、久明の筆になる本書に吉田家の翁秘説の投影があるのは、徳田隣忠から仕入れた知識によつてい  
る可能性もあろう。

以上のように、本書は吉田家の翁秘説が金剛流にも及んでい  
たことを確実にする資料であり、江戸後期以後の金剛家の翁秘  
説を伝える点で貴重な資料と言えよう。また、冒頭の《翁》上  
演前の故事や開口についての記事も資料として貴重なものと言  
える。

#### 〔凡例〕

- 一、翻刻は基本的に底本に忠実であることを旨としたが、読  
解の便を考慮して、適宜、句読点、返り点等を付した。
- 一、本文中の旧字体や異体字は新字体に改めた。
- 一、本文中には「口伝」を「口イ」としている箇所があるが、  
これはすべて「口伝」とした。
- 一、本文中の「一」（四十五）とある部分は朱書である。  
また、これ以外には朱筆の箇所はない。

#### 翁秘書

- 一、先当日早旦行水。入<sub>レ</sub>塩。
- 一、着<sub>二</sub>装束浄衣<sub>一</sub>、加持咒文。口伝。
- 一、手水之咒文。口伝。

#### 一、御面箱置所。

北方<sub>ニ</sub>設<sub>レ</sub>机<sub>於</sub>、南向<sub>ニ</sub>奉<sub>レ</sub>安置<sub>之</sub>。狂言置<sub>レ</sub>之。兼而箱之  
中<sub>ニ</sub>八寸太麻<sub>於</sub>納置取<sub>レ</sub>之、私<sub>ニ</sub>我身<sub>一</sub>。次千歳、脇、狂言  
共<sub>ニ</sub>太夫<sub>一</sub>以<sub>ニ</sub>太麻<sub>一</sub>、

私之咒文。口伝。

陰日咒文。口伝。

一、件祓串<sub>於</sub>取、私<sub>ニ</sub>御面箱<sub>一</sub>。箱<sub>ニ</sub>四手有<sub>一</sub>。今<sub>ハ</sub>不<sub>レ</sub>附<sub>レ</sub>之。

一、神供、神酒備<sub>レ</sub>之。以<sub>ニ</sub>祓串<sub>一</sub>私<sub>レ</sub>之。

神供。千歳備<sub>レ</sub>之。口伝也。

神供品々。口伝也。

神酒。脇備<sub>レ</sub>之。

神酒、御灯、瓶子口等口伝有。

一、神供咒文。口伝。

一、神酒咒文。口伝。

右頂戴之節、品有<sub>レ</sub>之也。

今ハ

一、三宝<sub>ニ</sub>熨斗。

#### 神前

一、三宝三寸洗米。奉<sub>レ</sub>備、幕掛り前<sub>ニ</sub>頂戴<sub>スル</sub>。尤熨

斗モ同断。

一、手向太麻。口伝。

一、鉾持扇咒文。口伝。

一、護神身法<sub>此童子御有</sub>。口伝。

一、神靈招請之太事。口伝。

一、十宝内縛印此義子細有。口伝。

一、五臟安寧加持。口伝。

一、天神地神同体乃觀念。口伝。

一、幕上懸或時岩戸乃印。口伝。

一、同、陰陽乃足踏アリ。口伝。

一、橋掛リ太事。口伝。

一、着座老神樂之太事。口伝。

一、心中祈念。口伝。

一、翁所作之事。口伝。

仕舞付之事也。

一、とう／＼たらり再、文字之事。口伝。

一、三之哥咒文等。口伝。

一、翁帰老幕上入留。口伝。

付翁帰リノ事。口伝。

一、神靈發遣太事。口伝。

一、内縛印明此義子細有。口伝。

一、二日、三日、四日、

千歳ウタイヤウカワル。同音モ同断。四日、セリフ田哥

ノ事。笛座着共ニカワル。口伝。

一、十二月往来。口伝。

#### 翁之次第

天太玉命 千歳

印相之時、扇ヲ腰ニサス。印相給テ、扇右ノ手ニテトリ、左ニウ

ツシ、又右ニ如レ常モツ。

天児屋根命 太夫

天鈿女命 三番三

是ヲ四宮神ト云。

手刀雄命 脇

笛吹大明神 笛

高嶋明神 小鼓

源太夫神 大鼓

熱田大明神 太鼓

八百万神 地唄後見

一、父尉ハ 白鬚大明神。

一、延命冠者ハ 西宮太神宮。

復云。

武持神 千歳

春日三之御殿 翁也

住吉大明神 三番三

笛吹大明神 笛

蛙子 小鼓

駿河浅間  
源太夫神  
八百万神  
如斯モ云。

大鼓  
太鼓  
地唄後見

極秘書

一、翁ハ惣して神代神樂の作法也。むかし日神岩戸に引籠り  
たまふ時、諸神しう会して神わさ有しに、天細女命か舞  
し給ふ。是則根元也。神代のむかし日神納受あり。いわ  
んや下界の神にをいてをや。委ハ口伝ニアリ。

一、第一翁ト云ハ

太玉神

千歳振也。

第二

天兒屋根命

神道翁也。

第三

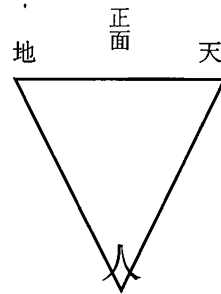
天鈿女命

三番申樂也。

天のうすめ鈴をふり、神樂を舞たまふ。この時岩戸をお  
しひらき給ふ。その時しよ神、あわれ、あなおもしろ、  
あなたのし、あなさやけ、ほけく。

是神樂の根元、神道ちやうくの極秘也。口伝重々有。

翁舞の内



天地人三才の拍子、陰陽等秘事有之。口伝云云。

一、神功皇后三韓御たいしの時、九州筑前の国はかたのこお  
り、諸軍勢を集テ大酒給ふとき、烏帽子狩衣を着したる白髪  
の翁来テ神功皇后に申やう。なんしよのせとを御渡りある間、  
供奉申へしと申す。大酒たまふ時、武持神舞給ふ。是を後に  
武内神と云。武内の宿祢なり。宿祢ハ氏也。この後件の翁ま  
ひ給ふ。今申樂に用ル翁ハ是を表也。然るに三かんをしたか  
へ給ひて後、神託によりて住吉大明神とする也。当座にお  
いてしらする也。武持の舞則千歳振也。天照太神、住吉大明  
神同一体也。

三番申樂ハ 興玉神也。

## 鈴之事

一、神代<sup>ヒコ</sup>今<sup>ニ</sup>鈴<sup>ヒ</sup>あらす。榊竹<sup>カサネ</sup>ノ葉<sup>ハ</sup>振玉<sup>マタリ</sup>也。依<sup>ナ</sup>鈴<sup>ノ</sup>柄<sup>ヲ</sup>帟<sup>ニ</sup>つつ、ミ、中に榊竹ノ葉<sup>ハ</sup>入<sup>リ</sup>也。数其儀口伝。今ハ不包也。

再鈴<sup>ノ</sup>伝<sup>ヲ</sup>授有。

一、おさへくおう。此儀口伝也。

復云。

天神地祇人神ヲ祝祭り祈念心持アリ。

初日ハ天神、二日ハ地神、三日ハ人神也。故ニ初日ハ千秋万歳<sup>ヲ</sup>云。天の如ク長久なる心也。二日ハ田うへの事<sup>ヲ</sup>云。地徳ヲ祝心也。三日ハ子孫繁昌ノ事<sup>ヲ</sup>云。人神ヲ祝祭心也。何茂陰陽<sup>ヲ</sup>表、天地人ノ三才<sup>ヲ</sup>備<sup>タル</sup>ニヨリテ神明の内證<sup>ニ</sup>叶。爰<sup>ヲ</sup>以祈念之心持、感心極秘也。

## 風流之事

一、天神地祇感應したまふ故ニ万物ノ精靈顯<sup>レ</sup>出<sup>テ</sup>舞かなて奉<sup>レ</sup>祝心也。能ハ神樂より出たり。神樂の根元<sup>ハ</sup>前<sup>ニ</sup>如<sup>レ</sup>書岩戸の前の作法也。天地の有情非情共ニ目出度事なれハ頭ハれ出奉<sup>レ</sup>祝心也。物の精靈出能<sup>ヲ</sup>成<sup>テ</sup>唄かなつるは風流おもしろき事となれり。<sup>口伝ニ有</sup>

## 開口之事

一、脇勤<sup>レ</sup>之。何にても脇能尤置鼓也。名乗ノ前<sup>ニ</sup>有<sup>レ</sup>之。古来ハ自分<sup>ニ</sup>作<sup>テ</sup>勤し事也。今ハ

御前御能之節、開口云、被<sup>ニ</sup>仰付<sup>一</sup>勤事也。<sup>古來ノ事太キヨリ作テ脇江渡ノ事也</sup>

一、自<sup>ニ</sup>懷中<sup>一</sup>太麻袋開口出<sup>レ</sup>之、脇<sup>ニ</sup>渡<sup>ス</sup>。依<sup>テ</sup>一氣開<sup>ル</sup>、云ニ開口<sup>ニ</sup>可<sup>レ</sup>秘々々。

脇請取、開口<sup>ヲ</sup>一氣開<sup>ク</sup>マテ黙ス。口伝<sup>止</sup>云云。

一、四日ハ初日ニカエルト。

乍<sup>レ</sup>去四日<sup>ノ</sup>之事具<sup>ニ</sup>有<sup>レ</sup>之ハ歸<sup>ルト</sup>云ハ大方ノ事ニシテ品有<sup>レ</sup>之ヲ云儀也。

一、翁<sup>ト</sup>大方書ドモ本<sup>ハ</sup>於幾名<sup>ト</sup>書也。名を置ト云儀也。

一、翁<sup>ト</sup>書ニシサイアリ。口伝<sup>ニ</sup>有<sup>レ</sup>之。

## 翁所作之事

一、左<sup>ノ</sup>足<sup>●</sup>出<sup>●</sup>、舞台真中<sup>ヨリ</sup>少地唄座の方<sup>ニ</sup>出たると思ふ程に出、正面ムキ、左<sup>ノ</sup>足<sup>ヨリ</sup>出、右<sup>ニ</sup>トメ、左引。袖なおし左<sup>ノ</sup>ヒザツキ、右ノ袖なをし、<sup>三</sup>拜。扱ヒザ立カエ立、左ノ足より<sup>●</sup>二テ世ニツク<sup>●</sup>口伝有。四ノミカヘスナリ<sup>●</sup>の<sup>上</sup>行、目付柱<sup>ノ</sup>方<sup>ニ</sup>向<sup>ヘ</sup>し、左ノ足右の方<sup>ニ</sup>スベラス心トクト下<sup>ニ</sup>居ル。尤、脇正面の方<sup>ニ</sup>向<sup>ヘ</sup>し。千歳御面箱<sup>ヲ</sup>置<sup>ニ</sup>角カケテ置ザルヤウ<sup>ニ</sup>コノムベシ。扱、千歳座<sup>ニ</sup>ツキ、三番<sup>●</sup>三仕手柱の内<sup>ニ</sup>入。笛大小共<sup>ニ</sup>座<sup>ニ</sup>着。笛座<sup>ツキ</sup>吹。小鼓打<sup>ヲ</sup>

ロシテ、トウ〜ト唄。千歳角トル時<sup>ハ</sup>扇下<sup>ニ</sup>置、面<sup>ヲ</sup>両手<sup>ニテ</sup>トリ、ヒボトキ左<sup>ニ</sup>手<sup>ニ</sup>持、右<sup>ノ</sup>手<sup>ニテ</sup>袋<sup>ヲ</sup>トリ、箱<sup>ノ</sup>フタ<sup>ニ</sup>ヲキカクル也。尤、ヒボ後見ムスブ。「座シテ」ト箱<sup>ニ</sup>両手<sup>カケ</sup>左<sup>ノ</sup>方<sup>ヨ</sup>セ、「マイロウ」ト立<sup>テ</sup>、右<sup>ノ</sup>アシヨリ出扇開。大小<sup>ノ</sup>前行<sup>キ</sup>、正面<sup>ニテ</sup>両<sup>手</sup>合<sup>セ</sup>、尤、正面ムク。扱手<sup>ヲ</sup>ノケ扇<sup>ロクニ立テ</sup>アクル。「千早振」トウタフ。「ソヨヤ」ト左右<sup>ノ</sup>ゴトクアト<sup>江</sup>シテタツハイ。「千年の鶴」ト唄、「アリワラヤ」ト右<sup>ノ</sup>アシヨリ右<sup>ウケテ</sup>左<sup>廻リ</sup>、シテ柱<sup>ノ</sup>キワ<sup>ニテ</sup>シカケノヤウニシテ拍子<sup>ニ</sup>「アレハ」トヒラク。正面<sup>左右ノコトク</sup>シテ出サシトメノゴトクメコシカ、メ、扇<sup>ヲ</sup>ウケノリニ、扱立「イヤイヤハホ、」ト出<sup>ル</sup>。尤、左<sup>ノ</sup>足<sup>目付柱ノ方</sup>出「イヤイヤハホ、」ト留<sup>拍子</sup>三、是迄出<sup>ル</sup>。足数口伝アリ。扱大臣柱<sup>ノ方</sup>行、右<sup>出</sup>、右<sup>トメ</sup>拍子<sup>三</sup>、是迄。足数口伝アリ。是ヨリカマワス左<sup>廻リ</sup>、左右<sup>ノ</sup>ヤウニシテ出、角<sup>出</sup>左<sup>袖</sup>かつき、扇<sup>下</sup>の方<sup>よ</sup>せ、右<sup>廻リ</sup>、角<sup>左袖</sup>マキ、スミトルヤウニシテ左<sup>廻リ</sup>、大小<sup>ノ</sup>前<sup>左右ノコトク</sup>跡<sup>シテ</sup>、コシカ、メ、扇<sup>下</sup>にてウケ、拍子<sup>三</sup>。扱アカリ、「千秋万歳」トウタフ。「万歳楽」ト左<sup>廻リ</sup>、両<sup>手</sup>アワセ、「万歳楽」ト顔<sup>扇ノ方</sup>下<sup>ル</sup>。扱箱<sup>ノ方</sup>へムキ、右<sup>ノ</sup>アシヨリ出、右<sup>トメ</sup>、右<sup>ヒザツキ</sup>扇<sup>下</sup>ニヲキ、面<sup>ヌキ</sup>両手<sup>ニテ</sup>イタベキ、箱<sup>ノ</sup>フタ<sup>ニ</sup>ヲキ、扇<sup>持</sup>、扱<sup>ヒサ立</sup>カエ、立<sup>テ</sup>、右<sup>出</sup>、フタイマンナカ<sup>正面ムキ</sup>出、左<sup>足</sup>トメ、右<sup>ノ</sup>ヒザツキ、拝<sup>扱居立</sup>、ヒサ立カエ、橋掛<sup>向立</sup>、右<sup>アシヨリ</sup>出<sup>ル</sup>。

「タツホ、ホ」ニアワセシテ柱<sup>ノ</sup>キワマテアワセ、右<sup>トメ</sup>、是ヨリカマワス<sup>入</sup>也。

### 太夫後見之事

一、太鼓<sup>ノ</sup>アトヨリ出、笛<sup>ノ</sup>上<sup>行</sup>イ。太夫、面<sup>カ</sup>クル時<sup>ニ</sup>ヒホムスブ。太夫立<sup>後</sup>二面箱<sup>フタ</sup>トリ、鈴<sup>取</sup>出<sup>シ</sup>、鈴<sup>ノ</sup>方<sup>ヲ</sup>持、千歳<sup>渡</sup>。黒色<sup>取</sup>出<sup>シ</sup>、地唄<sup>取</sup>次、後見座<sup>渡</sup>ス。扱<sup>も</sup>とのこ<sup>とく</sup>ふたを置、太夫面箱<sup>ノ方</sup>来<sup>時</sup>見<sup>合</sup>、能所<sup>ナ</sup>ヲスベシ。太夫<sup>入</sup>前<sup>ノ</sup>の後見<sup>切戸口</sup>ヨリ入<sup>ヘシ</sup>。アトノ後見<sup>ハ</sup>鈴<sup>ノ</sup>段<sup>過</sup>面箱<sup>シ</sup>マイ、切戸口<sup>ヨリ</sup>持<sup>テ</sup>入<sup>ヘシ</sup>。

一、黒星<sup>印</sup>シ 極秘也。

数<sup>ハ</sup>ツアリ。 ■外如<sup>解</sup>シルシ口伝<sup>ニ</sup>アリ。

一、朱<sup>ノ</sup>印<sup>シ</sup> 口伝也。

数<sup>ハ</sup>四十五アリ。

一、中臣<sup>祓</sup>

一、最要<sup>中</sup>臣<sup>祓</sup>

右、翁勤朝、可<sup>ニ</sup>相勤<sup>也</sup>。如<sup>レ</sup>此趣致<sup>ニ</sup>伝受<sup>一</sup>、以<sup>レ</sup>略可<sup>レ</sup>

勤<sup>レ</sup>之也。

波羅伊玉意

喜余目出玉

一、猿樂<sup>ニ</sup>云事、猿女君<sup>名</sup>ヨリワコレリ。委<sup>ハ</sup>口伝<sup>ニ</sup>アリ。



右、翁秘書、金剛代々家伝、雖<sup>レ</sup>為<sup>ニ</sup>極秘<sup>一</sup>、依<sup>レ</sup>為<sup>ニ</sup>厚望<sup>一</sup>令<sup>ニ</sup>相伝書写<sup>一</sup>贈之候。毛頭他見無用。努々おろそかに不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>致者也。

年号月日

名判

誰殿

如<sup>レ</sup>斯認<sup>可</sup>贈。努々おろそかに不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>伝。又仕舞付之内朱引之下<sup>ニ</sup>一<sup>一</sup>二三付<sup>テ</sup>有。是ハ付間敷、只朱引斗可<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>之也。

宝永二歲<sup>乙酉</sup>九月吉曜日

金剛太夫坂戸久明〔印〕〔花押〕